植物防疫講座

虫害編−21

野菜・花きのハモグリバエ類の発生生態と防除

京都府農林水産技術センター農林センター　徳（とく）　丸（まる）　晋（すすむ）

はじめに

ハモグリバエは，ハエ目（Diptera），ハモグリバエ科（Agromyzidae）に属する小型（体長2〜3 mm）の昆虫である。ハモグリバエの雌成虫は，葉の組織内に産卵し，幼虫は葉の柵状組織または海綿状組織を食害し，白い筋状の潜孔を形成する。加害が激しい場合に葉は白化する。ハモグリバエの加害により，果菜類では，収穫対象である果実は加害されないため，加害量が少ない場合には生産物の収量と品質に影響はない。しかし，加害量が多くなると，光合成量が低下するため，収量および品質に影響を与える（Ledieu and Helyer, 1985）。一方で葉菜・花き類では，収穫対象である葉が直接加害されるので，加害量はわずかでも生産物の品質は著しく低下する。

我が国において，野菜・花きを主に加害し，被害が問題になるハモグリバエ類は，*Liriomyza* 属のトマトハモグリバエ *L. sativae* Blanchard，マメハモグリバエ *L. trifolii*（Burgess），ナスハモグリバエ *L. bryoniae*（Kaltenbach），アシグロハモグリバエ *L. huidobrensis*（Blanchard）およびネギハモグリバエ *L. chinensis*（Kato）ならびに *Chromatomyia* 属のナモグリバエ *C. horticola*（Goureau）の6種である（徳丸，2010）。これら6種ハモグリバエは，形態および加害様式が酷似しており，肉眼で識別することが極めて困難である（徳丸，2018）。また，6種ハモグリバエの発育，増殖能力等の生物学的特性，寄主植物，殺虫剤感受性は異なる（徳丸，2010）。したがって，ハモグリバエ類の防除対策を構築するには各農作物で発生するハモグリバエの種の把握，生物学的特性および殺虫剤感受性について正しく理解することが重要となる。本稿では，我が国で問題になる6種ハモグリバエの発生生態，生産現場での簡易識別法および防除法について紹介する。

Ecology and Management of *Liriomyza sativae*, *L. trifolii*, *L. bryoniae*, *L. huidobrensis*, *L. chinensis*, and *Chromatomyia horticola*.
By Susumu Tokumaru
（キーワード：ハモグリバエ類，生態，防除，ハエ目，*Liriomyza* 属）

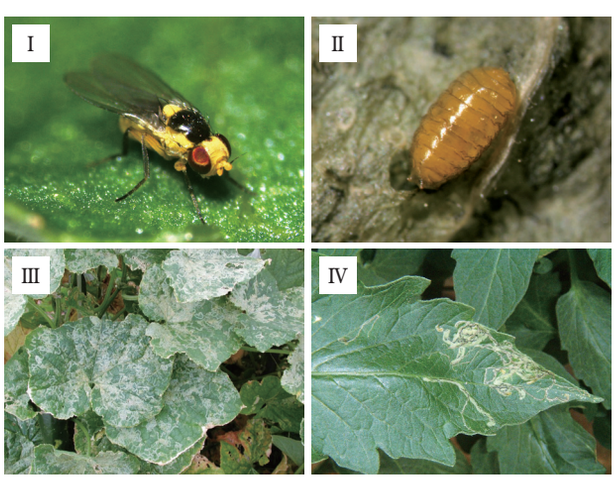
I　野菜・花きに発生するハモグリバエ類

1　トマトハモグリバエ　*Liriomyza sativae* Blanchard（図−1）

原産地はアメリカ大陸であり，ハワイ，グアム，タヒチ（Spencer, 1973），アフリカ大陸（Deeming and Mann, 1999），インド，タイ（Martinez, 1994）および中国（Chen et al., 1998）へ侵入した。我が国では，1999年に沖縄県，山口県および京都府において初めて発生が確認され（岩崎ら，2000），それ以降，東北以南の都府県で発生が確認されている（徳丸，2008）。本種は，ハモグリバエ類による被害がそれほど問題にならなかったキュウリなどのウリ科作物で多発する（徳丸・阿部，2001）。主に夏期から秋期にかけて多発し（Tokumaru et al., 2007），休眠性はなく（徳丸・阿部，2003），暖房設備の整ったハウスで越冬すると考えられている（Tokumaru et al., 2007）。

2　マメハモグリバエ　*Liriomyza trifolii*（Burgess）（図−2）

トマトハモグリバエと同様にアメリカ大陸を原産地とし，カナダ，アフリカ，ヨーロッパ（Minkenberg and van Lenteren, 1986），台湾（Wang and Lin, 1988），インド（Lakshminarayana et al., 1992）および韓国（Han et al., 1996）へ侵入した。我が国では，1990年に静岡県およ



図−1　トマトハモグリバエの成虫（I），蛹（II）およびキュウリ（III）とトマト（IV）の被害葉

植物防疫